

【参考資料】 謡曲詞章

高砂・定家・三井寺・弱法師・鞍馬天狗

1 この【参考資料】謡曲詞章は、日本古典文学大系『謡曲集』上・下（横道萬里雄・表章校注 岩波書店 一九六〇・六三年）に準拠して作成したものである。

2 謡曲詞章は、原則として本文のみを掲載し、振り仮名・振り漢字、および頭注、傍注（演出注記等）は割愛した。ただし、三井寺、弱法師、鞍馬天狗のシテまたはワキとアイの対応部分については、曲全体の流れを示すため、生かすようにした。

3 本文中の「*」を付した箇所は編者による補記である。

謡曲詞章

《高砂》

* 底本… 伝信光自筆本 (法政大学能楽研究所蔵)

1 「真ノ次第」

〔次第^{強合}〕 ワキ連 今を始めの旅衣、今を始めの旅衣、日も行く末ぞ久しき。

〔名ノリ^{不合} 詞^{不合}〕 ワキ そもそもこれは九州阿蘇の宮の神主友成とはわがことなり、われいまだ都を見ず候ふほどに、このたび思ひ立ち都に上り、道すがらの名所をも一見せばやと存じ候

〔上ゲ哥^{強合}〕 ワキ連 旅衣、末遙ばるの都路を、末遙ばるの都路を、けふ思ひ立つ 浦の波、舟路のどけき 春風の、幾日来ぬらん 跡末も。いさ白雲の遙ばると、さしも思ひし 播磨潟、高砂の浦に着きにけり、高砂の浦に着きにけり。

2 「真ノ一声」

〔一セイ^{強合} 詞^{不合}〕 ツレ 高砂の、松の春風 吹き暮れて、尾の上の鐘も響くなり。

ツレ 波は霞の 磯隠れ、 ツレ 音こそ汐の 満ち干なれ。

〔サシ^{不合} 強^{不合}〕 ツレ たれをかも 知る人にせん高砂の、松も昔の友な

らで、 ツレ 過ぎ来し世々は白雪の、積もり積もりて老いの鶴の、寝ぐらに残る有明の、春の霜夜の起き居にも、松風のみ聞き慣れて、心を友と菅筵の、思ひを述ぶるばかりなり。

〔下ゲ哥^{強合} 詞^{不合}〕 ツレ 訪れは、松に言問ふ 浦風の、落ち葉衣の 袖添へて、木蔭の塵を搔かうよ、木蔭の塵を搔かうよ。

〔上ゲ哥^{強合} 詞^{不合}〕 ツレ 所は 高砂の、所は 高砂の、尾の上の松も 年古りて、老いの波も 寄り来るや、木の下蔭の 落ち葉かく、なるまで命ながらへて。 なほいつまでか 生の松、それも久しき 名所かな、それも久しき 名所かな。

3 「問答^{不合} 詞^{不合}」 ワキ 里人を相待つところに、老人夫婦来れり、いかにこれなる老人に尋ぬべきことの候 ツレ こなたのことにて候

ふかなにごとにて候ふぞ ワキ 高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ ツレ 只今この尉が木蔭を清め候ふこそ、高砂の松にて候へ

ワキ 高砂住吉の松に相生の名あり、当所と住吉とは國を隔てたるに、なにとて相生の松とは申し候ふぞ ツレ 古今の序に曰はく、

高砂住吉の松も相生のやうに覺えとあり、さりながらこの尉はあの津の國住吉の者、これなる姥こそ当所の人なれ、知ることあらば申さ給へ ワキ 不思議や見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住吉高砂の、浦山國を隔てて住むと、いふはいかなることやらん ツレ うたての仰せ候ふや、山川萬里を隔つれども、互に通

ふ心づかひの、妹背の道も遠からず シテまつ案じてもご覧せよ、

シテ高砂住吉の、松は非情の物だにも、相生の名はあるぞかし、

ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ慣れたる尉

と姥は、松もろともにこの年まで、相老いの夫婦となるものを。

「掛ヶ合不合」 ワキ謂はれを聞けば面白や、さてさて先に聞こえつ

る、相生の松の物語りを、所に言ひ置く謂はれはなきか シテ昔

の人の申ししは、これはめでたき世の例なり、 ツレ高砂といふ

は上代の、萬葉集のいにしへの義、 シテ住吉と申すは、今この

み代に住み給ふ延喜のおんこと、 ツレ松とは尽きぬ言の葉の、

シテ榮えは古今相同じと、 ツレみ代を崇むる譬へなり ワキよ

くよく聞けば有難や、今こそ不審春の日の、 シテ光和らぐ西の

海の、 ワキかしこは住吉 シテここは高砂、 ワキ松も色添ひ

シテ春ものどかに

「上ヶ哥強合」 地 四海波 静かにて、國も治まる 時つ風、枝を鳴ら

さぬ み代なれや、逢ひに 相生の、松こそめでたかりけれ。 げ

にや 仰ぎても、事もおろかや かかる代に、住める民とて 豊かな

る、君の恵みぞ 有難き、君の恵みぞ 有難き。

4 「□不不」 ワキなほなほ高砂の松のめでたき謂はれ詳し

くおん物語り候へ 上掛。 下掛ハヤヤ異

「クリ不不」 地 それ草木心なしとは申せども花実の時を違へず、陽

春の徳を備へて南枝花始めて開く。

「サシ不不」 シテしかれどもこの松は、その気色とこしなへにして

花葉時を分かず、 地 四つの時至りても、一千年の色雪のうちに深

く、または松花の色十回りとも言へり、 シテかかるたよりを松

が枝の、 地 言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて、 シテ生

きとし生ける者ごとに、 地 敷島の蔭に寄るとかや。

「クセ強合」 地 しかるに長能が言葉にも、有情非情のその聲、み

な歌に洩るることなし、草木土砂、風聲 水音まで、萬物の籠も

る心あり、春の林の、東風に動き 秋の虫の、北露に鳴くも、

みな和歌の姿ならずや。 中にもこの松は、萬木に勝れて、十

八公のよそほひ、千秋の緑をなして、古今の色を見ず、始皇の

おん爵に、預かる程の 木なりとて、異國にも、本朝にも、萬民

これを賞翫す。 シテ高砂の、尾の上の鐘の音すなり、 地 暁

かけて、霜は置けども 松が枝の、葉色は同じ 深緑、立ち寄る蔭

の朝夕に、搔けども 落ち葉の 尽きせぬは、まことなり 松の葉

の、散り失せずして 色はなほ、真拆の葛 永き世の、譬へなりけ

る 常磐木の、中にも名は 高砂の、末代の 例にも、 相生の松ぞ

めでたき。

5 「ロンギ強合」 地 げに名を得たる 松が枝の、げに名を得たる 松

が枝の、古い木の昔 現はして、その名を名のり 給へや、ツレ今
はなにをか包むべき、これは高砂 住吉の、相生の 松の精、夫婦
と現じ 来りたり、 地不思議やさては 名所の、松の奇特を 現は
して、 ツレ草木心 なければ、 地畏き代とて ツレ土も木も、
地わが一 大君の 國なれば、いつまでも 君が代に、住吉に まづ行
きて、あれにて待ち 申さんと、夕波の 汀なる、海人の一 小舟に
打ち乗りて、追ひ風に 任せつつ、沖のかたに 出でにけりや、沖
のかたに 出でにけり。

6 「問答・語り」 (*省略)

7 「上ゲ哥^{強合}」 ワキ連 高砂や、この浦舟に 帆を上げて、この浦
舟に 帆を上げて、月もろともに 出で潮の、波の淡路の 島影や、
遠く鳴尾の 沖過ぎて、はや住吉に 着きにけり、はや住吉に 着き
にけり。

8 「出端」

「サシ^{強不合}」 シテわれ見ても 久しくなりぬ住吉の、岸の姫松いく
代経ぬらん、睦まじと 君は知らずや瑞垣の、久しき代々の神かぐ
ら、夜の鼓の拍子を揃へて、すずしめ給へみやづこたち。

9 「上ノ詠^{強不合}」 地西の海、櫂が原の 波間より。 シテ現はれ
出でし 神松の。

「(一)セイ^{強不合}」 シテ春なれや、残んの雪の 浅香湯、 地玉藻刈
るなる 岸蔭の、 シテ松根に倚つて腰を摩れば、 地千年の翠手
に満てり。 シテ梅花を折つて頭に挿せば、 地二月の雪衣に落
つ。

「神舞」

10 「ロンギ^{強合}」 地有難の 影向や、有難の 影向や、月住吉の 神
遊び、み影を拜む あらたさよ、 シテげにさまざまの 舞ひ姫の、
聲も澄むなり 住吉の、松影も 映るなる、青海波とは これやらん、
地神と君との 道直に、都の春に 行くべくは、 シテそれぞ還城
楽の舞、 地さて萬歳の シテ小忌衣、 地さす一腕には、悪魔を
払ひ、納むる手には、寿福を 抱き、千秋楽は 民を撫で、萬歳楽
には 命を延ぶ、相生の 松風、颯々の聲ぞ 楽しむ、颯々の聲ぞ
楽しむ。

《定家》

* 底本…伝禪鳳自筆本（宝山寺藏）

1 「次第」

〔次第^{弱合}〕
ワキ連 山より出づる 北時雨、山より出づる 北時雨、行くへや定めなかるらん。

〔名ノリ^{詞不合}〕
ワキ これは北國がたより出でたる僧にて候、われい

まだ都を見ず候ふほどに只今思ひ立ち都へ上り候

〔上ゲ哥^{弱合}〕
ワキ連 冬立つや、旅の衣の朝まだし、旅の衣の朝ま

だし、雲も行き交ふ遠近の、山また山を越え過ぎて。もみぢに残る眺めまで、花の都に着きにけり、花の都に着きにけり。

〔着キゼリフ^{詞不合}〕
ワキ やうやう急ぎ候ふほどにこれははや上京とかや申し候

2 〔□^{詞不合}〕
ワキ 面白や 頃は神無月十日あまり、木々の梢も冬

枯れて、枝に残りのもみぢの色、所どころの有様までも、都の気色はひと入の、眺め殊なる夕べかな、や、時雨の降り来りて候、

これなる宿りに立ち寄り時雨を晴らさばやと思ひ候

3 〔問答^{弱合}〕
シテ 詞のうのうその宿りにはなにとて立ち寄せ給

ひ候ふぞ
ワキ 詞さん候ふ只今の時雨に立ち寄りて候、さてこの所

をばいかなる所と申し候ふぞ
シテ 詞 それは時雨の亭として由ある所

なり、その心をも知るしめして立ち寄せ給ふかと思へばかやう

に申し候
ワキ げにげにこれなる額を見れば時雨の亭と書かれた

り、折から面白う候、さてこれはいかなる人の建て置かせ給へる

所にて候ふぞ
シテ 詞 これは藤原の定家の卿の建て置かせ給へる所

なり、都の内とは申しながら心凄く、時雨ものあはれなればとて

この亭を建て置き、年どし歌をも詠じさせ給ひしとなり、節古跡

といひ折からといひ、逆縁の法をも説き給ひて、かのご菩提をも

お弔ひあれと、勧め参らせんそのために、詳しく教へ申すなり。

ワキ さては定家の卿の建て置かせ給ひし所かや、さてさて時雨を

留むる宿の、歌はいづれの言の葉やらん
シテ 詞 いやいづれとも定

めなき、時雨の頃の年どしなれば、別きてそれとは申し難しさり

ながら、時雨時を知るといふ心を、節偽りの、なき世なりけり神

無月、詞誰がまことより時雨れ初めけん、その事書きに私の家に

てと書かれたれば、もしこの歌をや申すべき
ワキ 節 げにあはれな

る言の葉かな、さしも時雨は偽りの、亡き世に残る跡ながら、

シテ 人は徒なる古言を、語れば今も假の世に、
ワキ 節 他生の縁は朽

ちもせぬ、これぞ一樹の蔭の宿り、
シテ 節 一河の流れ汲みてだに、

ワキ 心を知れと
シテ 節 折からに

〔上ゲ哥^{弱合}〕
地今降るも、宿は昔の時雨にて、宿は昔の時雨にて、心住みにしその人の、あはれを知るも夢の世の、げに定め

なや定家の、軒端の夕時雨、古きに帰る涙かな。庭も籬もそれとなく、荒れのみ増さる草叢の、露の宿りも枯れがれに、物妻き夕べなりけり、物妻き夕べなりけり。

4 「問答詞不合」 シテけふは志す日に当たりて候ふほどに墓所へ参り候、そとおん参り候へかし、ワキそれこそ易きほどのおんことにて候へおん供申し候ふべし

「問答詞不合」 詞テのうのうこれなる石塔一覽さむらへ ワキ不思議やなこれなるしるしを見れば星霜古りたるに、葛葛這ひ纏ひて形も見え別かず、これはいかなる人のしるしにて候ふぞ 詞テこれは式子内親王のおん墓にて候、葛葛をば定家葛と申し候 ワキあら面白や定家葛とはいかやうなる謂はれにて候ふぞ 詞テ式子内親王始めは賀茂の齋きの院にそなはり給ひ、程なく下り居させ給ひしに定家の卿忍び忍びのおん契り浅からず、その後式子内親王程なく空しくなり給ひしに、定家の執心葛となつて、おん墓に這ひ纏ひて互の苦しみ離れやらず、節共に邪淫の妄執を、おん経を讀み弔ひ給はば、なほなほ語り参らせさむらはん。

「クリ詞不合」 地忘れぬものをいにしへの、心の奥の信夫山、忍びて通ふ道芝の、露の世語り由ぞなき。

「サシ詞不合」 シテいまは玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば、地忍ぶることの弱るなる、心の秋の花薄、穗に出で初めし契りとて、

また離れがれの中となりて、シテ昔は物を思はざりし、地後の心ぞ果てしもなき。

「クセ詞合」 地あはれ知れ、霜より霜に朽ち果てて、世々に古りにし山藍の、袖の涙の身の昔、憂き恋せじと禊せし、賀茂の齋きの院にしも、そなはり給ふ身なれども、神や受けずもなりにけん、人の契りの、色に出でけるぞ悲しき。包むとすれど徒し世の、徒なる中の名は洩れて、よその聞こえは大方の、そろ恐ろしき日の光、雲の通ひ路絶え果てて、少女の姿留め得ぬ、心ぞ辛きもろとも。シテげにや嘆くとも、恋ふとも逢はん道やなき、地君葛城の峰の雲と、詠じけん心まで、思へばかかる執心の、定家葛と身はなりて、このおん跡にいつとなく、離れもやらで葛もみぢの、色焦がれ纏はれ、棘の髪も結ばほれ、露霜に消え返る、妄執を助け給へや。

5 「ロンギ詞合」 地古りにしことを聞くからに、けふも程なく呉織、怪しやおん身たれやらん、シテたれとても、亡き身の跡は浅茅生の、霜に朽ちにし名ばかりは、残りてもなほ由ぞなき、地よしや草葉の忍ぶとも、色には出でよその名をも、シテ今は包まじ、地この上は、われこそ式子内親王、これまで見え来れども、まことの姿はかげろふの、石に残す形だに、それとも見えぬ葛葛、苦しみを助け給へと、言ふかと思えて失せにけ

り、言ふかと見えて 失せにけり。

6 「問答・語り」 (*省略)

7 「上ゲ哥弱合」 ワキ連夕べも過ぐる 月影の、夕べも過ぐる 月影の、松風更けて 物凄き、草の蔭なる 露の身を。 念ひの珠の数々に、弔ふ縁は 有難や、弔ふ縁は 有難や。

8 「習ノ一声」

「下ノ詠弱不合」 シテ 夢かよ、闇の現つ の 宇津の山、月にもたどる、蕙の下道。

「(クリ)弱不合」 シテ 昔は松風蘿月に言葉を交はし、翠帳紅閨に枕を並べ、 ワキさまさまなりし情の末、 シテ 花ももみちも散りぢりに、 ワキ朝朝の雲 シテ 夕べの雨と

「哥弱合」 地 古言も 今の身も、夢も現つも 幻も、共に 無常の、世となりて 跡も 残らず。 なに かなかなかの 草の蔭、さらば 律の 宿ならで、外は つれなき 定家葛、これ 見給へや おん僧。

9 「掛ケ合弱不合」 ワキあら痛はしのおん有様や なら痛はしや。 仏平等説如一味雨、随衆生性所受不同。 シテ 覽ぜよ 身は徒波の立ち居だに、亡き跡までも 苦しみの、定家葛に 身を閉ぢられて、かかる 苦しみ 隙なきところに、有難や。

「掛ケ合弱不合」 シテ 只今 誦誦し 給ふは 菓草 喻品 よのう ワキ かな

なかなれや この 妙典に、洩るる 草木 も ならざれば、執心の 葛をか け離れて、仏道 ならせ 給ふべし シテ なら有難や げにも げにも、

これぞ 妙なる 法の心、 ワキ 普き 露の 恵みを受けて、 シテ 二つも なく ワキ 三つも なき

「哥弱合」 地 一味の 一み法の 雨の 滴り、皆 潤ほひて 草木 國土、悉皆 成仏の 機を得ぬれば、定家葛も 掛かる 涙も、ほろほると 解け 広 ければ、よろよると 足弱車の、火宅を 出でたる 有難さよ。 この 報恩に いざさらば、ありし 雲居の 花の 袖、昔を 今に 返すな る、その 舞ひ 姫の 小忌衣

10 「□弱不合」 シテ 面無の 舞の、 地 有様やな。

「序ノ舞」

11 「ノリ地弱大兼」 シテ 面無の 舞の、有様やな、 地面無や 面映ゆ の、有様やな、 シテ もとより この 身は、 地月の 顔ばせも、 シテ 曇りがちに、 地 桂の 眉墨も、 シテ おちぶるる 涙の、 地 露と 消えても、 つたなや 蕙の 葉の、 葛城の 神姿、恥づかしや 由なや、 夜の 契りの、 夢の うちにと、 ありつる 所に、 帰るは 葛の 葉の、 もとのごとく、 這ひ 纏はるる や、 定家葛、 這ひ 纏はるる や、 定家葛の、 はかなくも、 形は 埋もれて、 失せにけり。

《三井寺》

* 底本：現行宝生流謡本

1 「サシ」 シテ南無や大慈大悲の觀世音さしも草、さしもかしかき誓ひの末、一称一念なほ頼みあり、ましてやこの程日を送り、夜を重ねたる頼みの末、などかそのかひなからんと、思ふ心ぞあはれなる

「下ゲ哥」 シテ憐み給へ思ひ子の、行く末なにとなりぬらん、行く末なにとなりぬらん。

「上ゲ哥」 地枯れたる木にだにも、枯れたる木にだにも、花咲くべくはおのづから。いまだ若木のみどり子に、ふたたびなどか逢はざらん、ふたたびなどか逢はざらん。

「□」 シテあら有難や候、すこし睡眠の中に、あらたなる靈夢を蒙りて候、またわらはをいつも訪ひ慰むる人の候、あはれ来り候へかし語らばやと思ひ候

2 「名ノリ」 (アドアイは、宿泊させた女性を迎えに行くと言つて歩み出し、シテと顔を合わせる)

「問答」 (アドアイは真中に床几を据えてシテに腰かけさせ、自分は目付柱際に座つて、靈夢があつたかと問う) シテ只今すこし睡眠の中に、あらたなる靈夢を蒙りて候 (アドアイはどんな夢かと問う) シテわが子に逢は

んと思はば、近江の國三井寺へ参れと、あらたに靈夢を蒙りて候 (アドアイは、「尋ぬる人に近江の國、わが子を三井寺」などと、合わせてやる) シテさてその三井寺へはいづかたへ参り候ふぞ (アドアイは今道峠を越える道を教える) シテあら嬉しとおん合はせ候ふや、告げに任せて三井寺へ参り候ふべし 「アシライ中入」

3 「次第」

「次第」 ワキ連秋も半ばの暮れ待ちて、秋も半ばの暮れ待ちて、月に心や急ぐらん。

「名ノリ」 ワキこれは江州園城寺の住僧にて候、またこれにわたり候ふ幼き人は、愚僧を頼むよし仰せ候ふほどに、力なく師弟の契約をなし申して候、また今夜は八月十五夜明月にて候ふほどに、幼き人を伴ひ申し、皆々講堂の庭に出でて、月を眺めばやと存じ候

「上ゲ哥」 ワキ連類ひなき、名を望月の今宵とて、名を望月の今宵とて、夕べを急ぐ人心、知るも知らぬももろともに。雲を厭ふやかねてより、月の名頼む日影かな、月の名頼む日影かな。

4 「問答・小舞」 (ワキがオモアイを呼び出す。オモアイは真中へ出て膝まずき、ワキの命で小舞「いたいけしたる物」を舞う。舞い終つて幕の方のざわめきを聞きつけたていで立ちあがり、狂女が来ると知つて、呼び入れようとワキ連に相談する。ワキ連がよせと言うので、オモアイは残念がり、自分の計らいにするから、こちらへ

狂女を通せと言つて、笛前に着座する。

5 〔二声〕

〔サシ〕 シテ雪ならばいくたび袖を払はまし、花の吹雪と詠じけん、志賀の山越えうち過ぎて、眺めの末は湖の、鳩照る比叡の山高み、上見ぬ鷲のお山とやらんを、今日の前に拝むことよ、あら有難のおんことや。 かやうに心あり顔なれども、われは物に狂ふよのう、いやわれながら理なり、あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし、ましてや人の親として、いとほし悲しと育てつる

〔一セイ〕 シテ子の行くへをも白糸の、 地 乱れ心や狂ふらん。

〔カケリ〕 シテ都の秋を捨てて行かば

〔段哥〕 地月見ぬ里に、住みや慣らへると、さこそ人の笑はめ、よし花ももみぢも、月も雪も古里に、わが子のあるならば、田舎も住みよかるべし。 いざ古里に帰らん、いざ古里に帰らん。 帰ればさざ波や、志賀辛崎の一つ松、みどり子の類ひならば、松風に言問はん。 松風も、今は厭はじ桜咲く、春ならば花園の、里をも早く杉間吹く、風すさまじき秋の水の、三井寺に着きにけり、三井寺に早く着きにけり。

6 〔掛ケ合〕 ワキ 桂は実る三五の暮れ、名高き月にあくがれて、庭の木蔭に休らへば シテげにげに今宵は三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心、水の面に、照る月並みを数ふれば、

秋も最中夜も半ば、所からさへ面白や

〔上ゲ哥〕 地月は山、風ぞ時雨に鳩の海、風ぞ時雨に鳩の海、波も粟津の森見えて、海越しの、幽かに向かふ影なれど、月は真澄みの鏡山。 山田矢橋の渡し舟の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はばおのづから、舟も焦がれて出づらん、舟人も焦がれ出づらん。

7 〔□□〕 (オモアイが常座に立ち、酒宴で酔つて鐘の時刻を忘れかけたと言ひ、真中へ出て、鐘を撞くさまをしながら「じゃんもんもん」と鐘の音を口で唱える。)

シテは一ノ松に立つて鐘を聞き、するすると舞台に入つて、笹でオモアイを打つ。オモアイは、「蜂が刺いた」とおどけて飛びのく。以下、立つたままシテ・アイ問答。流派によりこの問答がない)

〔問答〕 シテわらはも鐘を撞かうずるにて候 (アイは、これは人の撞かぬ鐘だと言ふ) シテ人の撞かぬ鐘ならばなにとておことは撞くぞ (アイは、自分はこの寺の鐘つく法師だなどと言ひ、笛前に着座する。以下シテは立つたまま詞。以上の問答のない流派では、一ノ松で鐘を聞いてすぐ「面白の」と謡い出し、「わらはも鐘を」と舞台に入る)

〔□□〕 シテ面白の鐘の音やな、わが古里にては清見寺の鐘をこそ

常は聞き慣れしに、これはまたさざ波や、三井の古寺鐘はあれど、昔に帰る聲は聞こえず、まことやこの鐘は秀郷とやらの童宮より、取りて帰りし鐘なれば、童女が成仏の縁に任せて、わらはも鐘を撞くべきなり

〔次第〕 地影はさながら霜夜にて、影はさながら霜夜にて、月いや鐘は冴えぬらん。

8 「問答」 ワキやあやあ暫らく、狂人の身にてなにとて鐘をば撞くぞ急いで退き候へ シテ夜度公が楼に登りしも、月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ ワキそれは心ある故人の言葉、狂人の身として鐘撞くべきこと、思ひもよらぬことにてあるぞとよ

〔語り〕 シテ今宵の月に鐘撞くこと、狂人としてな厭ひ給ひそある詩に曰はく、團々として海嶠を離れ、冉冉として雲衢を出づ、この後句なかりしかば、明月に向かつて、心を澄まいて、此夜一輪満てり、清光何れの処にか無からんと、この句を設けて、あまりの嬉しさに心乱れ、高樓に登つて鐘を撞く、人びといかにと咎めしかば、これは詩狂と答ふ、かほどの聖人なりしだに、月には乱るる心あり、ましてや拙き狂女なれば

〔哥〕 地許し給へや人びとよ、煩惱の夢を覺ますや、法の聲も静かに、まづ初夜の鐘を撞く時は、シテ諸行無常と響くなり、地後夜の鐘を撞く時は、シテ是生滅法と響くなり、地晨朝の響

きは、シテ生滅滅已 地入相は、シテ寂滅 地為樂と響きて、菩提の道の鐘の聲、月も敷添ひて、百人煩惱の眠りの、驚く夢の世の迷ひも、はや撞きたりや後夜の鐘に、われも、五障の雲晴れて、真如の月の影を、眺め居りて明かさん。

9 「クリ」 地それ長樂の鐘の聲は、花の外に尽きぬ、シテまた竜地の柳の色は、地雨の中に深し。

〔サシ〕 シテそのほかここにも世々の人、言葉の林のかねて聞く、地名も高砂の尾の上の鐘、暁かけて秋の霜、曇るか月もこもりく、初瀬も遠し難波寺、シテ名所多き鐘の首、地尽きぬや法の聲ならん。

〔クセ〕 地山寺の、春の夕暮れ来て見れば、入相の鐘に、花ぞ散りける、げに惜しめども、など夢の春と暮れぬらん、そのほか暁の、妹背を惜しむきぬぎぬの、恨みを添ふる行くへにも、枕の鐘や響くらん、また待つ宵に、更け行く鐘の聲聞けば、飽かぬ別かれの鳥は、物かはと詠ぜしも、恋路の便りの、音づれの聲と聞くものを。または老いらくの、寢覺め程経るいにしへを、今思ひ寝の夢だにも、涙心の淋しさに、この鐘のつくづく、思ひを尽くす暁を、いつの時にか比べまし。シテ月落ち鳥啼いて、地霜天に満ちてすさまじく、江村の漁火もほのかに、半夜の鐘の響きは、客の船にや通ふらん、蓬窓雨滴りて、慣れし潮路の楫枕、浮

き寝ぞ変はこの海は、波風も静かにて、秋の夜すがら月澄む、
三井寺の鐘ぞさやけき。

10 「問答」 子方いかに申すべきことの候、ワキなに「ことにて候ふぞ、子方これなる物狂ひの國里を問うてたまはり候へ、ワキこれは思ひもよらぬことを承り候ふものかな、さりながら易き間のこと尋ねて参らせうずるにて候、いかにこれなる狂女、おことの國里はいづくの者にてあるぞ、シテこれは駿河の國清見が関の者にて候、子方なにのう清見が関の者と申し候ふか、シテあら不思議や、いま物を仰せられつるは、まさしくわが子の千満ごさめれあら珍らしや候、ワキ暫らく、これなる狂女は粗忽なることを申すものかな、さればこそ物狂ひにて候、シテのうこれは物には狂はぬものを、物に狂ふも別かれゆゑ、逢ふ時はなににしに狂ひ候ふべき。これはまさしきわが子にて候、ワキ連そこ退き候へ、子方あら悲しやさのみなおん打ち候ひそ、ワキ言語道断、はや色に出で給ひて候、この上はまつずぐにおん名のり候へ」

「クドキ」 子方今はなにをか包むべき、われは駿河の國、清見が関の者なりしが、人商人の手に渡り、今この寺にありながら、母上われを尋ね給ひて、かやうに狂ひ出で給ふとは、夢にもわれは知らぬなり、シテまたわらはも物に狂ふこと、あの児に別かれしゆゑなれば、たまたま逢ひ見る嬉しさのまま、やがて母よと名の

ること、わが子の面伏せなれど

「下ゲ哥」 シテ子ゆゑに迷ふ親の身は、恥ぢも人目も思はれず。

「ロンギ」 地あら痛はしのおんことや、よそ目も時によるものを、逢ふを喜び給ふべし、シテ嬉しながらも衰ふる、姿はさすが羽束師の、漏りて餘れる涙かな、地げに逢ひ難き親と子の、縁は尽きせぬ契りとて、シテ日こそ多きに今宵しも、地この三井寺に巡り来て、シテ親子に逢ふは、地なにゆゑぞ、この鐘の声立てて、物狂ひのあるぞとて、お咎めありしゆゑなれば、常の契りには、別かれの鐘と厭ひしに、親子のための契りには、鐘ゆゑに逢ふ夜なり、嬉しき鐘の聲かな。

11 「ギリ」 地かくて伴なひ立ち帰り、かくて伴なひ立ち帰り、親子の契り尽きせずも、富貴の家となりけり、げに有難き孝行の、威徳ぞめでたかりける、威徳ぞめでたかりける。

《弱法師》

*底本…世阿弥自筆本転写本（宝山寺蔵）

1 「次第」

〔次第^合〕 ワキ連 難波の海も 彼の岸に、難波の海も 彼の岸に、至るやみ法 なるらん。

〔名ノリ^{詞不合}〕 ワキこれは津の國天王寺の住侶にて候、さる御かたさまより志すことありとて、この彼岸七日の間、天王寺の西門石の鳥居にて大施行を引かれ候ふが、この住持に仰せつけられて候、さるほどに近里の貴賤、市をなして皆々施行を受け候、ことさら今日は中日にて候ふほどに、日想観をも拜まんとて、人びと群集し候

〔問答^{詞不合}〕 ワキ施行皆々急ぎ候へ

〔触レ〕（底本はここに「ヲカシ シカくく」と注する。アイが常座に立つて施行が行われるよしを触れるのだから。）

*現行《弱法師》（見出し…編者）

〔名ノリ^笛〕

〔名ノリ^{詞不合}〕 通俊かやうに候ふ者は、河内の國高安の里に、左衛門の尉通俊と申す者にて候、さてもそれがし子を一人持ちて候ふを、さる人の讒言により、暮れに追ひ

失ひて候、あまりに不便に候ふほどに、天王寺にて一日施行を引き候、今日も申し付け施行を引かせばやと存じ候（上掛。下掛モホボ同）

〔問答・触レ〕（通俊は「いかにたれかある」といいながら真中へ行く）
アイおんに候（通俊は施行を言い付ける） アイ畏つて候（通俊は脇座に行つて着座する。アイは常座に立つ） アイ皆々承り候へ、左衛門殿の施行は今日満座にて候ふ間、受けたき者は急いで参り候へ、その分心得候へ、心得候へ（そう触れてアイはアイ座または笛前に着座する）

2 「一声」

〔「セイ^{詞不合}〕 ツレ出で入りの、月を見ざれば 明け暮れの、夜の境をえぞ知らぬ。 ツレ難波の海の底ひなき、 ツレ心のほどを人や知る。

〔サシ^{詞不合}〕 シテそれ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、ツレ比目の枕の上には、波を隔つる愁ひあり、いはんや心あり顔なる、人間有為の身となりて、憂き年月の流れては、妹背の山の中に落つる、吉野の川のよしや世とも、思ひも捨てぬ心かな、恨めしや前世にたれをか厭ひけん、今また人の讒言により、不孝の罪に沈むゆゑ、思ひの涙かき曇り、盲目とさへなり果てて、生をも変へぬこの世より、中有の闇に迷ふなり。

「下ゲ哥弱」 ツレもとよりの、心の闇はありぬべし。

「上ゲ哥弱」 ツレ傳へ聞く、かの一行の果羅の旅、かの一行の果羅の旅、闇穴道の巷にも、九曜の「曼荼羅の光明、赫奕として行く末を、照らし給ひけるとかや。今も「末世といひながら、さすが名に負ふこの寺の、仏法「最初の天王寺の、石の鳥居ここなりや、立ち寄りて参らん、いざ立ち寄りて参らん。

3 「掛ケ合不台」 ワキ連「頃は如月時正の日、まことに時ものどかなる、日を得て普き貴賤の場に、施行をなして勧めけり ツレげに有難きおん利益、法界無縁の大悲ぞと、踵を継ぎて群集する

「問答不台」 ワキ「これに出でたる乞丐人は、いかさま例の弱法師か
シテ「現なや この乞食に名を付けて、皆弱法師と承るぞや、 節げにもその身は乞食の、盲亀の心寄るべもなき、足弱車の片輪ながら、よろめき歩けば弱法師と、名付け給ふは理や。 □げにかりそめの言葉までも、面白く聞こえ候ふぞや、疾く疾く施行を受け候へ 詞テ「受けまゐらせ候はん、や、あら面白や花の香の匂ひ候ふは、いかさまこの花の散り掛かり候ふのう □これなる木蔭の梅の花が、弱法師が袂に散り掛かるぞとよ □あらうたてのお言葉や、所は難波津の梅ならば、ただこの花とこそ仰せあるべけれ、 ツレ節「今は春べの半ばぞかし、梅花を折つて頭に挿まざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の匂ひやな。

*現行《弱法師》

「問答不台」 通俊「これに出でたる乞丐人は、いかさま例の弱法師な 詞テ「うたてやなまたわれらに名を付けて、皆弱法師とのたまふぞや、 節げにもこの身は盲目の、足弱車の片輪ながら、よろめき歩けば弱法師と、名付け給ふは理や。 通俊「詞げに言ひ捨つる言の葉までも、情ありげに聞こゆるぞや、まづまづ施行を受け候へ 詞テ「受けまゐらせ候はん、や、花の香の聞こえ候、いかさまこの花散りがたになり候ふな 通俊「詞おこれなる籬の梅の花が、弱法師が袖に散り掛かるぞとよ 詞テ「うたてやな難波津の春ならば、ただ木の花とこそ仰せあるべきに、 節今は春べも半ばぞかし、梅花を折つて頭に挿まざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の花の匂ひやな。

〈宝生。観世・下掛モホボ同ジ〉

「掛ケ合不台」 ワキ「げにげに優しく申したり、げにこの花を袖に受くるは、花もさながら施行ぞとよ 詞テ「なかなかなりや草木國土は、悉皆恵みを施行にて、 □皆成仏の大慈悲に、 詞テ「洩れじと施行に連らなりて、 ワキ「手を合はせ 詞テ「袖を広げて
「上ゲ哥弱」 地「花をさへ、受くる施行の色々に、受くる施行の色々に、匂ひ来にけり 梅衣の、春なれや、何はのことか 法なら

ぬ、遊び戯れ舞ひ歌ふ、誓ひの網には洩るまじき、難波の海ぞ頼もしき。げにや盲亀のわれらまで、見るこちする梅が枝の、花の春ののどけさも、難波の法によも洩れじ、難波の法によも洩れじ。

4 「クリ弱不合」 地それ仏日西天の雲に隠れ、慈尊の出世まだ遙か、三會の暁いまだなり。

「サシ弱不合」 シテしかればこの中間において、なにと心を延ばめまし、地ここによつて上宮太子、國家をあらため萬民を教へて、仏法流布の世となして、普き恵みを広め給ふ、シテすなはち当寺をご建立あつて、地始めて僧尼の姿を現はし、四天王寺と名付け給ふ。

「クセ弱合」 地金堂のご本尊は、如意輪の仏像、救世観音とも申すとか、太子のご存生、震旦國の思禪にて、わたらせ給ふゆゑ、出けの仏像に應じつつ、今日域に至るまで、仏法最初のご本尊と、現はれ給ふ おん威光の、まことなるかなや、末世相應のおん誓ひ。しかれば当寺の仏閣の、み作りの品じなも、赤梅檀の靈木にて、塔婆の金宝に至るまで、閻浮檀金なるとかや。シテ萬代に、澄める亀井の水までも、地水上清し 西天の、無熱の池水を受け継ぎて、流れ久しき世々までも、五濁の一人間を導きて、濟度の舟をも寄するなる、難波の寺の鐘の聲、異

浦々に響き来て、普き誓ひ満ち潮の、おしてる海山も、皆成仏の姿なり。

5 *現行《弱法師》

「詞不合」 通俊これなる者をいかなる者ぞと思ひて候へば、それがしが追ひ失しなひし子にて候ふはいかに、思ひのあまりに盲目となりて候、あら不便と衰へて候ふものかな、人目もさすがに候へば、夜に入つてそれがしと名のり、高安へ連れて帰らばやと存じ候へ上掛。下掛モホボ同

「掛ケ合不合」 ツレ詞のうのう日想観今なりとて皆人びとの拌み候シテげにもげにも日想観の時節よのう、さりながら盲目なればそなたとばかり、ツレ心あてなる日に向かひて、シテ東門を拌み南無阿弥陀仏 ツレのう東門とは謂はれなや、ここは西門石の鳥居 シテあら愚かや天王寺の、西門に出でて極樂の、東門に向かふは僻事か ツレげにげにここは難波の寺の、シテ西門に出づる石の鳥居の、ツレ阿字門に入つて シテ阿字門を出づる、ツレ阿弥陀のみ國も ツレ極樂の
「詞不合」 ツレ東門に、向かふ難波の西の海、入り日の影も舞ふとかや。
「イロエ」

6 「□^{不合}」^弱 シテあら面白や尊やな、われ盲目の身にしあれば、この致景をば拝むまじきと、人はさこそは笑ふらめ、古人の中にも眼癡ひて、三明六通山河大地を、見たりし人もあるぞかし、況んやいまだ盲目とも、ならざりし時は弱法師が、常に見慣れし境界なれば、なに疑ひも難波津の、節 江月照らし松風吹く、永夜の清宵なにのなす所ぞや。

* 現行《弱法師》

「□^{不合}」^弱 シテあら面白やわれ盲目とならざりしきは、常に見慣れし境界なれば、節 常に疑ひも難波江の、江月照らし松風吹き、永夜の宵清なにのなす所ぞや。 〔上掛。下掛モホボ同〕

「ワカ^{不合}」 シテ住吉の、住吉の、地 松の木間より眺むれば。

シテ月落ちかかる、淡路し島山と

「中ノリ地^{弱合}」 シテ詠めしは 月影、地 詠めしは 月影、今は入り日ぞ落ちかかるらん、日想観なれば 曇りも波の、淡路繪島須磨明石、紀の海までも 見えたり見えたり、満目青山は 心にあり、シテおう 地 見るぞとよ 見るぞとよ

「(ロンギ)^{弱合}」 地 さて難波の浦の 致景の数々、シテ南はさこそと夕月の、住吉の 松原、地 東のかたは 時を得て、シテ春の

緑の日下山、地 北はいづく シテ難波なる、地 長柄の橋の徒らに、かなたこなたと 歩く程に、盲目の 悲しきは、貴賤の 人に行き逢ひの、轉び漂ひ 難波江の、足元は よるよると、げにもまことに 弱法師とて、人は笑ひ 給ふぞや、思へば 恥づかしやな、今は狂ひ 候ふまじ、今よりさらに 狂はじ。

7 「ロンギ^{弱合}」 通俊 今のはや、夜も更け人も 静まりぬ、いかなる人の 果てやらん、その名を名のり 給へや、^{ツレ}シテ思ひ 寄らずや たれなれば、わがいにしへを 問ひ給ふ、高安の 里なりし、俊徳丸が 果てなり、通俊 さては 嬉しや これこそは、父高安の 通俊よ、シテ 通俊は わが父の、そのおん聲と 聞くからに、^通俊 胸うち 騒ぎ 呆れつつ、シテ こは 夢か として 俊徳は、^地地 親ながら 恥づかしくて、あらぬかたに 逃げければ、父は 追ひ着き 手を引きて、なにをか 包む 難波寺の、鐘の 聲も 夜紛れに、明けぬ先にと 誘ひて、高安の 里に 帰りけり、高安の 里に 帰りけり。

《鞍馬天狗》

*底本…元頼識語本(某氏蔵)

1 「名ノリ詞不合」 シテかやうに候ふ者は鞍馬の奥僧正が谷に住まひする客僧にて候、さても当山において花見のよし承り及び候ふ間、立ち越えよそながら梢をも眺めばやと存じ候

2 「名ノリ詞不合」 オモアイこれは鞍馬の御寺に仕へ申す者にて候、さても当山において毎年花見のごさ候、殊に当年は一段当山の花見事にて候ふさる間、東谷へ只今文を持ちて参り候

3 「問答詞不合」 オモアイいかに案内申し候、西谷よりおん使に参りて候、これに文のごさ候ふご覽候へ

「詞不合」ウキなになに西谷の花今を盛りと見え候ふに、などおん音づれにもあづからざる、一筆啓上せしめ候ふ古歌に曰はく、
節けふ見ずは悔やしからまし花盛り、 詞 咲きも残らず散りも始めず、 節げに面白き歌の心、たとひ音づれなくとも、木蔭にてこそ待つべきに

「上ゲ哥詞合」 地花咲かば、告げんと言ひし山里の、告げんと言ひし山里の、使は来たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠桜。 手折り一葉を知るべにて、奥も迷はじ咲き続く、木蔭に並み居て、いざい

ざ花を眺めん。

4 「問答・小舞」(ワキが「いかに能力」と呼ぶ。アイが大小前へ出て膝まずいて、「おん前に候」と答える。ワキは、児たちの慰みに一曲かなでよと言う。アイは承知して小舞を舞う。この小舞は、普通「いたいたけしたる物」を舞う。この小舞の間に、シテが後見座を立つて常座へ出、立ったまま小舞を見ているが、小舞の終りごろに目付柱へ出て正面を向いたままと平座する。オモアイが気づく)

5 「問答詞不合」 オモアイいかに申し候、あれに客僧のわたり候、これは近頃狼藉なる者にて候ふ追つ立てうずるにて候、ワキ暫らく、さすがにこのおん座敷きと申すに源平両家の童形たちのおのおのごさ候ふに、かやうの外人は然るべからず候、しかれどもまたかやうに申し候へば人を選び申すに似て候ふ間、花をば明日こそご覽候ふべけれ、まづまづこの所をばおん立ちあらうずるにて候、オモアイいやいやそれはご誕にて候へどもただあの客僧を追つ立てうずるにて候、ワキいやいやただお立ちあらうずるにて候

「問答」(舞台上に残ったオモアイは、腹を立ててシテに向かって、自分の自由になるならこの拳を頂かせてやろうなどと言つて幕へ退場する)

6 「詞不合」 シテ言語道断のことにて候、某これに候ふとて皆々座敷きを立たれて候(金春・金剛)

〔サシ弱不合〕 シテ遙かに人家を見て花あれば便ち入る、論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ、春の慣らひと聞くものを、憂き世に遠き鞍馬寺、本尊は大悲多聞天、慈悲に洩れたる人びとかな。

〔掛ケ合不合〕 牛若 節 げにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友、

詞 それさへ誼はあるものを、あら痛はしや近う寄りて花ご覽候へ
シテ 思ひ寄らずや松虫の、音にだに立てぬ深山桜を、おん訪ひの
詞 有難さよこの山に、 牛若 節 ありともたれか白雲の、立ち交じはら
ねば知る人なし、 詞 したれをかも知る人にせん高砂の、 牛若 節

松も昔の 節 友鳥の

〔上ゲ哥弱合〕 地 おん物笑ひの種蒔くや、言の葉繁き恋ひ草の、
老いをな隔てそ垣穂の梅、さてこそ花の情なれ。 花に三春の
約あり、人にひと夜を馴れ初めて、後いかならんうちつけに、
心空に 榿柴の、馴れは増さらで、恋の増さらん悔やしきよ。

7 〔問答不合〕 シテいかに申し候、只今の児たちは皆々おん帰り
候ふに、なにとてご一人これにござ候ふぞ 牛若 詞 さん候ふ只今の

児たちは平家の一門、中にも安藝の守清盛が子どもたるによつて、
一寺の賞翫他山の覚え、時の花たり、 節 みづからも同山には候
へども、萬なにことも面目もなきことどもにて、月にも花にも捨
てられて候。 シテ 詞 あら痛はしや候ふさすがにわ上臈は、常磐腹
に三男、毘沙門の沙の字をかたどり、おん名をも沙那王殿と付け

申す、 節 あら痛はしやおん身を知れば、所も鞍馬の木蔭の月
〔哥弱合〕 地 見る人もなき山里の桜花、よその散りなん後にこそ、
咲かば 咲くべきに、あら痛はしのおんことや。

〔上ゲ哥弱合〕 地 松嵐花の跡訪ひて、松嵐花の跡訪ひて、雪と降
り雨となり、哀猿雲に叫んでは、腸を断つとかや、心凄の気
色や。夕べを残す花のあたり、鐘は聞こえて夜ぞ遅き、奥は
鞍馬の山道の、花ぞ知るべなる、こなたへ入らせ給へや。

〔哥弱合〕 地 してもこの程 お供して、見せ申しつる名所の、ある
時は、愛宕高雄の初桜、比良や横川の遅桜、吉野初瀬の名ど
ころを、見残すかたもあらばこそ。

8 〔ロンギ強合〕 牛若 さるにても、いかなる人にましませば、わ
れを慰め給ふらん、おん名を名のり おはしませ、 シテ今はな
にか包むべき、われこの山に年経たる、大天狗はわれなり、
地 君兵法の 大事を傳へ、平家を滅ぼし給ふべきなり、さも思し
めされば、明日参會申すべし、さらばと言ひて 客僧は、大僧正
が谷を分けて、雲を踏んで 飛んで行く、立つ雲を踏んで 飛んで
行く。

〔来序〕

9 〔名ノリ・シヤベリ〕 (来序) で出たアドアイの小天狗甲は常座に止まり、

木の葉天狗と名のり、立ったままの独白で前場の出来事を詳しくしゃべる。そして、その後天狗は沙那王に兵法を教えたが、沙那王は木の葉隠れ・霧の印などの秘事まで会得したので、今日は木の葉天狗たちも太刀打ちしろとの言い付けで出て来たが、ほかの者がまだ一人も来ていないから呼び出そうと言ひ、次の問答となる。

〔問答〕 小天狗甲 いかにも木の葉天狗たち疾う疾う出でられ候へ

以下同様にことでおやりやるぞ 小天狗甲 そのことぢや、さだめて皆出て居られうと思うたれば未だ出られなんだ、今日は沙那王殿の兵法を使はせらるるによつて、われらごときの者にもまかり出で打ち太刀を致せとのことぢやがなにとならうか 小天狗乙 なかなか打ち太刀をせいでは 小天狗甲 やれ沙那王殿の打ち太刀がなにとしてならうぞ 小天狗乙 むざとしたことを言はします、沙那王殿ぢやというても鬼神ではあるまいぞ 小天狗甲 さてはまことか 小天狗乙 なかなか 小天狗甲 そのごとくにそれがしが打つにさへ打たるるになにとしてならうぞ 小天狗乙 今のはおぬしが騙いたによつてのことぢや、尋常にならば打たれまい 小天狗甲 のう聞かしめ、みどもと打ち合ふとは違はうぞ、その子細は沙那王殿は大事をこごとく覚えさせられたと聞いたほどに、なかなかわれらごときの者が打ち太刀はなるまい 小天狗乙 その儀ならばみども体の者どもがこれにぐどぐどとして打たれてはなるまい、それがしはただ退くぞ退くぞ 小天狗甲 やい退くか退くか、みどもがこれに居るほどになにともあるまいぞ、待たしめ待たしめこれはさてはや退いた、それがしもいかに仰せ付けられたとて打ち

太刀をして打たれてはなるまい、ただ退かう、さりながら出たるしる

しにはただは戻られぬ、沙那王殿を呼び出だし申さう

〔□〕 小天狗甲 いかにもやいかに沙那王殿沙那王殿 (そう言った後、幕

へ退場する)

10 〔二声〕

〔□^{強不}合〕 牛若さても沙那王が出立には、肌には薄花桜の単に、顯

紋沙の直垂の、露を結んで肩に掛け、白糸の腹巻白柄の薙刀

〔(クリ)^{強不}合〕 地例へば天魔鬼神なりとも、さこそ嵐の山桜、花や

かなりける出立かな。

11 〔大ベシ〕

〔名ノリグリ^{強不}合〕 シテ抑々これは、鞍馬の奥僧正が谷に年経て住

める、大天狗なり

〔(中ノリ地)^{強合}〕 地まづおん供の 天狗は、たれたれぞ 筑紫には、

シテ彦山の 豊前坊、 地 四州には、 シテ白峰の 相模坊、 大山の

伯耆坊、 地 飯綱の三郎 富士太郎、 シテ大峰の 前鬼が一党、

葛城高間、 よそまでも あるまじ、 地 邊土においては シテ比良

地 横川、 シテ如意が岳、 地 我慢一高雄の 峰に住んで、 人のた

めには 愛宕山、 霞と棚引き 雲となつて、 月は鞍馬の 僧正が、

谷に満ち満ち 峰を動かし

「ノリ地大乗」 地嵐木枯らし、滝の音、天狗倒しは、おびたたしや

12 「問答不合」 シテいかに沙那王殿、只今小天狗を参らせて候、

稽古の際をばなんぼうおん見せ候ふぞ 牛若さん候ふ只今小天狗

ども来り候ふほどに、薄手をも斬りつけ稽古の際をも見せ申した
くは候ひつれども、師匠にや叱られ申さんと思ひ留まりて候 シテ

あらいとほしの人や、 詞さやうに師匠を大事に思しめすについ
て、さる物語りの候ふ語つて聞かせ申し候ふべし

「語り不合」 シテさても高祖の臣下張良といふ者、黄石公に一大事

を相傳す、ある時馬上に行き逢ひたりしに、なにとかしたりけん
左の沓を落とす、いかに張良あの沓取つて履かせよと言ふ、安か

らずは思ひしかども沓を取つて履かす、またその後も以前のごと
く馬上にて行き逢ひたりしに、今度は左右の沓を落とす、やあ張

良あの沓を取つて履かせよと言ふ、 節なほ安からず、 詞思ひ
しかども、よしよしこの一大事を相傳する上はと思ひ、落ちたる

沓をおつ取つて

「中ノリ地強合」 地張良沓を捧げつつ、張良沓を捧げつつ、馬の
上なる石公に、履かせけるにぞ心解け、兵法の奥義を傳へける。

シテそのごとくにわ上臈も、 地そのごとくにわ上臈も、さも花
やかなるおん有様にて、姿も心も荒天狗を、師匠や坊主とご賞

翫は、いかにも大事を 残さず傳へて、平家を討たんと 思しめす

かや、優しのこころざしやな

「ノリ地大乗」 地そもそも武略の、誉の道、

「舞働」

地そもそも武略の、誉の道、源平藤橘、四家にもとりわき、かの

家の水上は、清和天皇の、後胤として、あらあら時節を、考へ来
るに、驕れる平家を、西海に追つ下し、煙波滄波の、浮雲に飛行

の、自在を受けて、敵を平らげ、會稽を濯がん、おん身と守るべ
し、これまでなれや、お暇申して、立ち帰れば、牛若袂に、縋り

給へば、げに名残あり、西海四海の、合戦といふとも、影身を離
れず、弓矢の力を、添へ守るべし、頼めや頼めと、夕影暗き、頼

めや頼めと、夕影鞍馬の、梢に翔つて、失せにけり。